

談

話

室

ポスト「国際協同組合年」で思うこと

昨年(2012年)は、国連が定めた国際協同組合年だった。国連が国際協同組合年と定めた背景には、行き過ぎた市場原理主義によってたらされた貧富や地域の格差に、協同組合が協同の精神によって立ち向かってきた実績の評価と将来への期待があったという。そして、年間目標として「協同組合の認知度の向上」など3つが掲げられた。各地で、これらの目標を達成するために、様々な催しや活動が行われ、それなりの成果があったように思う。

私が、このような昨年経験したことなどから思うことを述べてみたい。

1つめは、某私大農学部からの依頼で「協同組合論」の集中講義をした時のことである。大学生が協同組合(特に農協)をどの程度知っているのか興味があったことから、講義のはじめに、イメージ調査を行った。質問は、銀行、スーパー、農協、生協、NPO、それぞれについて、①どのような組織で、何かをしているのか、②そのイメージは?、③色にたとえると何色かであった。

銀行、スーパーについては全員がほぼ正確に知っていたが、NPOについて知らない学生は40%、生協は25%、農協は15%いた。後者3つについて知っている学生でも、正確に知っている学生は少なかった。農協については「農産物の販売を手伝う組織」や「銀行のようなことをしているところ」など事業のごく一部分だけしか知らなかったり、「農業者のための組織」と思っている学生がほとんどであった。そのため、イメージも「古くさい」や「閉鎖的」が多かった。それに対して、生協は「食料品を売っているところ」や「地域の人々が生活しやすいようになっているところ」などが多く、イメージも「新鮮」、「明るい」など開放的なイメージがあるようだ。また、NPOは「ボランティアをしている組織」や「利益を目的とせず社会に役立つ活動をしているところ」など多かった。農協は農業者だけの閉鎖的な組織と考えられており、NPOと同じように非営利の運営や、営農だけでなく生協のように安心して暮らしていく活動もしていることなどが、イメージされていないようだ。

市民講座で農協の話をすると「農協って、農家でない我々も利用できるのです

か？」と驚かれることも多い。CMでも商品や景品の説明や利便性はPRされているが、出資金を出せば、誰でも利用できる組織であることは知らされていない。もっと身近で、いろいろな事業活動をしていることを知らせていくことが重要であろう。ちなみに、それぞれの色のイメージは、銀行は「シルバー」、農協は「緑」が多く、その他は分散するが、スーパーは「赤」と「緑」、生協は「白」、NPOは「黒」が比較的多かった。

2つめは、農協の若手職員の研修会でのできごとである。研修会の最初に、職員に農協の職員であることに誇りを持ってもらおうと思い、「今年は、国連が定めた国際協同組合年ですが、なぜそのように決められたのでしょうか？」と問い合わせたところ、全員がキヨトンとしているので、慌てて「今年は、国際協同組合年だと、知っている人？」と質問を変えたら、そのことを知っていたのは、ほんのわずかだった。国際協同組合年と知って、その目的を達成しようとしている人は、協同組合のトップなどごく一部の方々で、多くの農協職員は知らないようだ。協同組合は、国連に評価され期待されている組織であり、そのような組織で働いている誇りと、評価・期待されている組織であるからこそ、それに応える組織にしていこうという意識を全役職員に植え付け行動していくことが重要なのではないだろうか。

3つめは、私が歳を重ねてきたこともあり、最近「後継者、誰かいませんか？」とよく言われることである。何とか農協の研究者の端くれにいられるのも、これまで農協関係者の方々に育てられたお陰だと感謝している。さて、「若い農協の研究者は？」と言えば、優秀で活躍されておられる研究者もおられるが、農協の大きさと複雑さを考えると、研究者がありにも少ない。そのことを考えると、農協の進むべき方向をアドバイスでき、農協のことを正しく広報できる研究者の育成も重要であろう。

「国際協同組合年」は終わったが、これを契機に、組合員、役職員、地域住民(特に若者)などが、協同組合(農協)を正しく理解し、そこで働いたり、それに参画、利用する運動を、これまで以上に展開していくべきであろう。

(神戸大学大学院農学研究科 教授 高田 理・たかだ おさむ)